

# 山中湖での夏合宿を振り返って

< 2007年夏合宿の記録 >

総監督

大津保男

今年の山中湖夏合宿では、何かひと味違うものをとの期待感と使命感を抱きつつ、その日を迎えた。まさか昨年の合宿感想文に「たまには毛色が変わった環境で・・・」と記したからではないだろうが、加藤会長が春先から奔走してくれて、今回の計画が整ったからだ。宿舎「湖と渚」との調整段階で「山中湖交流プラザ『きらら』」の人工芝グラウンドが借りられそうだと話を聞き、B J 創立30周年の記念すべき年でもあり、例え経費がかかっても良い環境でやってみたいとの思いから計画を決定した。

最終的に40人（6年生5人、5年生12人、4年生13人、3年生10人）の参加となったこともあり、いつもなら4班のところを6年生の人数と同じ5班に分けての班組とし、6年生全員のリーダーシップに期待する。



天候が怪しいのは梅雨明け前のこの時期にはよくあることだが、山の天気は行ってみなければ分からない。少なくとも台風が来ていないことだけは幸いである。2時間余りの車中は合宿へのプロローグということで、今回は、ワールドカップのスーパープレーも基礎的な技術から生み出されていることを分かってもらうため、色々な側面から編集解説されているビデオを流してみた。少々長いものではあったが、車中での騒音予防の観点からも効果はあったものと思う。

貸し切りとなる宿舎に到着後は、挨拶、部屋割り、諸注意、今回のスローガンの確認、そして去年から始めたチャレンジシートの提出などを求め、早速、練習場所周辺の探検に出かけた。5分足らずで行ける場所であり、立地条件は最高。

施設の周囲をみんなでぐるりと気ままに歩いて回ったが、この時私の頭の中では、本日の練習の締めに行う予定の「班別ミニ駅伝大会」でのコースを考えながら進んでいたのは言うまでもない。

途中、天然芝の「原っぱ」では、精悍なお犬様たちが、贅沢にも緑鮮やかな芝の上を走り回って「ディスクドッグ競技会」の真っ最中。一方、我々の練習場所となる人工芝「ぴっち」もこの「原っぱ」に負けず劣らずの色鮮やかな美しさで、午後の練習に大きな期待がかかる。



小学生には分不相応と言えるほどの高額なグラウンド使用料であることから、使用時間を最大限に活用するため、昼食後の食休みの時間も効率的にということで一工夫。島崎コーチから借用したプロジェクターを用いて、最近出たばかりの三矢八千代さんのジンガ・トレーニングなどを少し紹介し、視聴覚的にリズム感やボディバランスのイメージをインプットした。

練習の方も、今回は少し趣向を変えて、「ボールを持つ・運ぶ」、「チャンスをつくる」、「得点に絡む」という3つのテーマ別に、それぞれ2グループずつ、全部で6つのグループに分かれて行うとともに、コーチ陣も普段とは異なる分担で担当してもらった。まさに今回のスローガンのうちの「チェンジ」の実践ということになる。



練習場所に足を踏み入れた時の足底や膝に伝わるやさしい感触は、何とも言えないほどで、そのうえ40人の子供たちでは広すぎて本当にもったいない。この日の夜に厚木でのシニアチームリーグ戦が入っていなければ、B.Wingsのメンバーも合宿に参加させたかったというのが本音のところ・・・。

一通りの練習も終わり、例年の合宿では「部屋別対抗試合」となるところだが、コーチ陣の人手が少なくなる三日目の午前中にこれを移し、初日の練習の締めは「班別ミニ駅伝大会」とした。山中湖ではこれまでも何度か経験しているのだが、夕方近くなると霧が出てくる。練習の途中から流れ込んできた霧は時折濃くなり、隣のクレイグラウンド「広っぱ」では高校生が野球の試合をしていたが、霧のため白球がほとんど見えなくなり中止となったような有様。

もしかしたらコースを見間違えたり、湖畔沿いのボードウォークから湖に落ちてしまうのではと心配もしたが、要所要所にコーチやお母さん方が立ち、誘導と声援を送ってもらったため、幸い行方不明者や脱走者を出さずに済んだ。

ミニ駅伝の名のとおり、コースが極めて短いため全員がかなりのペースで完走し、3班「れん」、4班「たいち」、5班「よしなり」、2班「ゆうご」、1班「ひろき」の順に6年生のアンカーが戻ってきた。この40数分の中で各班の襷が無事つながったことにより、合宿中の班の仲間意識も少しは生まれたのではないだろうか。



入浴と夕食の後のミーティングでは、今日の練習を振り返ってメモに残すなどの作業をしてもらい、手短かに切り上げた。というのも、この日はテレビで日本代表によるアジアカップ決勝トーナメントのオーストラリア戦が放映されるため、例のプロジェクターで迫力あるパブリックビューイングを楽しむこととしたのだ。だが、子供たちは途中までで打ち切りとし、「今日は疲れているだろうから、明日に備えて早く寝なさいよ。」とばかりに追いやり、残りは大人たちで替わりに観戦して過ごしたのであった。

一夜明けて二日目の朝、夜から早朝にかけての雨が道路に水たまりとなっているものの、散歩の時刻にはひんやりした曇り空。予定どおりいつもの湖畔に出かけて班別記念写真などの撮影会を済ませた。



合宿期間中のメインとなる二日目は、例年であれば半日は近くに宿泊しているチームとの練習試合なのだが、貧乏性というか器が小さいというか、よそのチームを呼んでこんな良いグラウンドを「タダで」使わせるのはもったいないと、今回はB」の独占使用とした。もちろんこれは人には決して言えない本音の部分であり、表向きは、「イレギュラーバウンドがなく、正確なパス技術の確認をすることのできる人工芝での練習時間を十分に取るため、他チームとの練習試合にあてられなかった。」ということになっている。それは、この日の朝に到着のコーチ等もあり、盤石の指導体制が確保されていることでも明らかである。( ? )

午前中3時間の練習では、全員でのウォーミングアップ、ステップング、フィジカルトレーニングなどの後、グループに分かれ、昨日に続いてのテーマ別練習を各コーチに分担してもらった。そして、午前中の練習の締めとすべく、広いグラウンドを有効に使い、3箇所それぞれ異なるパターンの条件設定によるゲームを行い、これまでの練習の成果を確認した。

昼食のため宿に戻った時間も無駄なく使い、7月の第45回B」オリンピックで久々に誕生した「よしなり」君の新記録（爆弾リフティング2065回）に対して、認定証授与等のセレモニーを行い、みんなで彼の偉業を讃えた。（パチパチパチ・・・）

その後も、グラウンドでは午前中に引き続いてのゲームをローテーションしな

がらこなし、さらに、広いピッチを全面使ったの 카테고리別の試合やコーチ陣との試合などで汗を流して二日目の練習は終了である。昨年のピストン輸送による慌ただししい移動に比べると、これほど近くて良い環境で練習できるというのは本当に大きな魅力だ。

ほぼ一日の練習で疲れた身体をお風呂で癒し、最後の夕食でパワーを付けた子供たちは少し早めに大広間に集まり、ミーティングの時間を使ってこれまでの感想文書きに取りかかった。その後、変化球として、お楽しみレクリエーションの定番であるビンゴゲームのスタートを少しお預けにして、突然のことではあるが、班ごとに相談して何かみんなの前で披露するように申し伝えた。

披露される内容に期待はしていないが、こちらの目論見は、突然の課題に対してどのようなリーダーシップが発揮されるか、そしてお互いに独創的なアイデアを出し合い、まとめるように協力しようという雰囲気が出るか、あるいは他人の前で堂々と表現ができるかなど、準備段階での子供たちの観察が目的である。

普段はなかなか見られない姿や思いがけないキャラクターが表に出たり、まあまあの成果ではあったが、今後は、もう少し早めに伝達して、エンターテインメント性を向上させても良いかも知れない。

さあ、いよいよ最後の日、朝まで降っていた小雨もみんなが起き出してくる頃には止んでおり、散歩には支障なし。「ボードウォーク」を通して「きらら」の外周を散策すると、物音に反応してか、それともエサを期待しているのか、魚たちが群れをなして集まってくる。雨上がりの爽やかな朝の散歩は気持ちが良い。



三日目の練習グラウンドは、クレイの「広っぱ」であり、入口付近は雨の名残で若干ぬかるんでおり、どこかの犯行現場のように怪しげな靴跡が点々と残っている。実は、今朝方、余りにもみんなの起き出しが遅いため、一人で事前に偵察に訪れたときの足跡であるが、一時間ほど前に比べればぬかるみもやや回復しており、これで結構水はけが良いことが確認された。

最後の練習は、軽い基礎練習に続き班別対抗試合がメインであるため、奥の方の比較的乾いているところを選んでコートをつくることとした。とはいえメジャーも使わずラインも引かず、歩数での計測とマーカーでの目印だけである。平日ということもありコーチ陣が半減しているため、重たいゴールの運搬にはとても難儀した。子供たちに手伝わせてもずっしりと腰や肩に重みを感じるほどであり、まさに御輿を担いでいるようであった。

10分1本のリーグ戦を10試合ほど行ったが、練習の成果が随所に出ており、対抗意識も手伝って学年の壁を感じさせない果敢なプレーが展開された。また、天気の回復も著しく、気温もぐんぐんと上昇し、これからの暑い夏を予感させる夏合宿の最終日となった。



練習終了後の記念撮影、宿での最後の昼食、荷物の積み込み、そしてご主人への挨拶などを済ませ、バスはいつものドライブインに向かい、お土産物選びのため30分ほどの時間を費やした。平日とあって特に渋滞もなく、予定より早めにバスは厚木に到着。車中ではぐっすりと寝込む子供たちの姿も多く、余り手のかからない帰路となった。

チャレンジシートからも読み取れたが、今回の合宿では、それぞれ個性の異なる5人の6年生が、下級生のみんなをまとめるということを目指して行動しようとしていた。もちろん練習や試合での頑張りも大切ではあるが、それ以上にこうした「リーダーシップ」を身につけることは大切だと思う。

また、子供の人数の半分以上に及ぶ多くのコーチやお母さん方の協力により、大した問題も起こらず、良い環境で快適な夏合宿を過ごさせてもらった。これまでずっと合宿に参加してきている中でも、自分にとっては満足度の高い合宿であり、そういう意味では経費に比してお値打ちの催しであったと言えるだろう。後は、子供たちがいつ頃どのような形で成果として反映してくれるか、大いに期待したいものだ。

なお、出発日の直前に急遽体調を崩した5年生の石田君は、残念ながら欠席となったが、その翌週の湯河原でのU-8夏合宿には家族全員で参加し、弟をはじめU-8のメンバー全員の後見役として、活躍してくれたことを付記しておく。

## H19年度 夏合宿全体テーマ

### スローガン

「チェック」、「チェンジ」、「チェイス」に「チャレンジ」

「チェック」・確認・情報収集は次への“準備”

物事にはすべて準備が必要。準備があって初めての的確な行動につながる。準備が整っているか、周辺状況はどうかなどの情報を自ら収集し、チェック(確認)する習慣を身につけよう。

「チェンジ」・変える・仕掛けるという“工夫”

自分と相手(他人)という関係の中で、すべての物事は進んでいく。自分の意識や考え方を試してみる、自分の行動を変えてみる、さらには、自分が相手を変えてみせる、という信念を持って積極的に働きかけるなど、状況を判断した上でチェンジする工夫を試みよう。

「チェイス」・追う・諦めないという“粘り”

生き延びるため野生動物は獲物を求めて一心不乱に行動する。標的(目的)に向かって進むという姿勢は、自らを成長させ向上させるために不可欠。ここだと言うときには、ハングリー精神を持って、最後まで決して諦めない粘り強さを発揮してみよう。

に「チャレンジ」・挑戦することでの“成長”

失敗の連続だからこそ成功した時の喜びは増す。「チェック」・「チェンジ」・「チェイス」に限らず、今回の合宿では、あらゆることに対して、失敗を恐れず果敢にチャレンジし、一つでも成果を得て自信を付け、大きく成長しよう。

### 全員の課題

「あいさつ」・「要求」・「指示」・「はげまし」の声 … 「声」はコミュニケーションの基本  
(「あいさつ」は、先に声を出した方が勝ちというゲームだと思って習慣づけよう。)

### 学年としての目標

- 6年生 B)の代表学年として、チーム全体の行動に責任を持ち、模範となるリーダーシップを身につけよう。
- 5年生 一人ひとりの持ち味に磨きをかけて、チーム力に反映しよう。
- 4年生 しっかり食べて体力をつけ、基礎技術を確実に身につけよう。
- 3年生 団体行動でのルールに慣れ、仲間と仲良くしよう。

